

年間第 19 主日の説教

金 大烈 神父 2009 年 8 月 9 日 (日)

《罪意識と悔い改め》

おはようございます。

時々このような話を聞きます。“私はどうしても信仰が深くなりません。祈りをしたり聖書を読んだり、いろいろ頑張っていますが、客観的に自分を見たら信仰が浅いと思います。信仰が深くなる方法はありませんか？”と質問をされる方がいらっしゃいます。多分皆様の中でも何故自分は十分な信仰の生活が出来ないのかと自分に対して疑問を持っている方もいらっしゃると思います。

“深い信仰は私には難しい”とされている方いらっしゃいますか？自分を含め、ここにいる方の 100%が手を挙げる必要があると思います。

同じことは司祭にも言えると思います。ある司祭がいました。その司祭は、なぜ信仰について確信が出来ないのか、子供の頃から信仰的な家庭で育ち、神学校に入り、今まで何年も司祭職を果しているにも関わらず、自分が自分を見てみたらやはり自分は司祭としてかなり信仰が無いように感じました。その司祭が悩んだ自分の心境を書いた文を紹介します。

彼が神学生の時に自分の祖母の体に癌にはなっていない悪性腫瘍が見つかりました。病院で治療を受けても悪性の物なので近いうちに入院をした方がいいと言われたそうです。それで、彼は、当時、治癒の恵みをいただいたある司祭に走りかけます。そして、自分の祖母の為に祈りを求めます。すると、その神父様が直接自宅まで来て按手をしながら祈り、祈りが終わった途端に“安心なさい。おばあさんは大丈夫だから心配しなくてもいい。”という言葉を残して帰られたそうです。それから 30 年たち 90 歳になった今でも腫瘍はレントゲンなどで検査しても形は残っていますが全然進行していないんだそうです。そのような経験の出来た司祭です。

そして、その事を見て自分も信仰の力を直接に体験したいという気持ちで、一人で部屋に入り、電気を消し、ろうそくを点け見つめながら“消えろ！消えろ！私は主イエスの名前でお前を消す。消えろ！消えろ！”と何度もろうそくを消そうと叫んだそうです。しかし反応は全然なく、結局諦めて息を吹きかけて消しながら、“だんだん自分が狂っていくんだな！”と独り語で言ったそうです。

その後、司祭になってからも、祖母が癒されたことを思い出し、何とか自分の信仰について試したかったそうです。“イエス様がおっしゃった通り辛子種一粒の信仰があれば何でもできる。不可能は無い。特に自分は司祭だからそれは必ず見せる事が出来る。”と思ったそうです。

ある日、按手を求めてくる人がいましたので、彼は大きい機会だと思い、手をその人の頭の上に置いてこのように祈ったそうです。

“イエス様、感謝します。自分は足りない司祭かもしれませんが、あなたの下さった霊の力によって、この人を癒したいです。あなたの力によって病からの解放をお願いします。癒されるのを固く信じます”と。しかし、手を離れたとたんに安手された人に“手術は旨く出来ると思います。”という言葉の口にしたそうです。その時、突然気がついたことがあったそうです。“なんだろう。なぜ、完璧に信じる事が出来なかったのか”、“按手する時に司祭として頂いた恵みによって、この人は必ず癒されるという強い信仰があったら「手術うまく出来ますよ」という言葉は出なかったんだろう”、“本当なら「あなたは心配しないで下さい、神様が全て癒して下さいから。」という言葉が出るべきだった”と。「手術うまく出来ますよ」と言った自分の事が悲しくなりました。なぜ私は強い信仰を持つことが出来ないのかを考え込んだそうです。その時、得た結論は『罪意識』為に強い信仰が出来ないんだ”ということだそうです。

皆様、大体私達は罪意識を持っています。罪意識を持って“私のような者がイエス様に願う資格が

あるのか、私のような者が願っても神様が聞いて下さるのか" と。このような気持が心の中に自然に出てきます。それが『悪魔のいたずら』じゃないかと思えます。悪魔は出来るだけ私たちが信仰を持たないように妨げます。その一つの方法は私たちに罪意識を思わせることです。熱心な信仰の生活をしようとしても『罪意識』は心の中にあります。子供の時に母親のお財布からお金を取ってお菓子を買に行った事などの記憶が全て出てきます。

その司祭が言う事は、私達が神様について堅く深く信頼できない理由はいろいろな事がありますが、やはりその一つは、私達の持っている『罪意識』だと、その司祭は言うのです。私はその本を読んで全くその通りだと思えました。皆様も全く身に覚えのない無意識的にも意識的にも『罪意識』に縛られている場合があります。実際に何よりも優先的に癒される必要があるのがその罪意識という傷じゃないかと思えます。その傷を治癒される方法として赦しの秘蹟を勧めたいんです。犯した罪が浮かぶ時、直ぐ告解部屋を探してください。あきらめないで、まず自分の心の中に残っている『罪意識』という傷を癒すべきです。その心を癒す動きを求めないと、いつも私たちは信仰的に進めないと思えます。赦されたという体験のよって感謝の心が可能になるからです。

皆様、赦しの秘蹟を和解の秘蹟と言います。そして癒しの秘蹟とも言います。これは赦しだけをもらう所ではありません、赦しをもらってもまた罪を犯します。赦しだけをもらうために、告解部屋に入ることは勧めません。それより皆様の心の中にある傷を癒されて、正しく信仰の生活に入って欲しいんです。

今日、“わたしは、天から降って来た生きたパンである”とイエス様はおっしゃいました(今日の福音 ヨハネ 6・41-51)。そのように信じながら、私達は御聖体を頂いています。しかし毎回毎回、これはイエス様の血だらけの肉だと実感しながらイエス様を頂くのは難しい事だと思えます。それでも私達は、毎回そのような感覚でイエス様を頂かなくてはなりません。その実感する感覚を求める事を妨げ、つまりさせる罪意識から解放されるように癒しを求めましょう。私たちの信仰がだんだん深くなるように。

私たちは信仰手金いろいろな事によって倒れます。倒れた事が大事な事ではなくて、倒したものが何であるかをわかろうとする心が必要です。『罪意識』も悔い改めの為に必要かも知れません。しかし悔い改めと『罪意識』は別のもので。例えば、祈りの時、“私は罪人です”と言うのは美しいことです。これは悔い改めと言います。しかし、“私のような者は出来ない”というのは悪魔の誘いである罪意識です。悔い改めは新しく人を生かします。『罪意識』は逃げるように人を追い立てて行きます。私達各自は神様に愛されているのを信じながら、罪があればその罪の原因になる傷の癒しを求めながら『罪意識』から解放されましょう。

ありがとうございました。